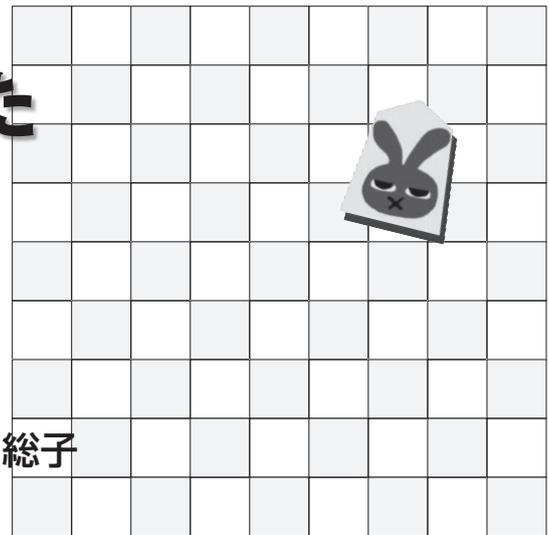




## 3 女流棋士として見た コンピュータ将棋



日本将棋連盟 女流棋士初段 安食 総子

静寂と云う方がいいのか、沈黙と云うべきなのか。そのときの会場の様子は、どう形容したらよいか分からないほど、特殊な雰囲気にも包まれていました。それは、“アマ名人がコンピュータ将棋に負ける”という歴史的場面に居合わせた私たちが感じた特別な空間でした。

そのとき私は加藤幸男アマ対「棚瀬将棋」の対局では時計係を、そして清水上徹アマ対「激指」の対局のときには大盤解説の聞き手役を務めていました。コンピュータ将棋選手権の本戦で、昨年よりもさらに強くなっているコンピュータソフトを目の前にしていましたが、対局前には、周りの人たちにも最後は人間が勝つのでは…という雰囲気があり、正直な話私もまだアマ名人のお二人が負けてしまうとは思っていませんでした。しかし、いざ対局が始まると加藤アマが完敗してしまい、そして清水上アマまでも得意な形から敗北を喫しました。

解説の勝又六段が、局面が進み人間側の形勢が悪くなっていくにつれて言葉少なになっていき、しまいには声が出ない状況になっていたようでした。私も聞き手役として何か話さなければ、と思いつつも何をどう言ったらいいのか、適当な言葉が見つからなくなってきている状態でした。

そして冒頭の、対局が終わった直後の静けさが起きました。そのときは信じられない気持ちではありましたが、まだそんなに大変なことが起きたとは思っていなかったのだから私も呑気なものでした。

それが打ち上げを終え、ホテルの自室に戻って携帯電話を見たときでした。なんとトップニュースに“アマ名人二人、コンピュータに敗れる”とあったのです。こんなに全国ニュースとして取り上げられ、活字になってしまうなんて。それを見た瞬間に私はこのコンピュータ勝利の意味の大きさを改めて感じることにになりました。

私が初めて“世界コンピュータ将棋選手権”を訪れたのは2003年第13回大会のときです。その当時は、まだ棋士間でも“コンピュータ将棋選手権”の認知度がそれほど高くなく、私もどんな大会なのか行くまでまったく想像もつかない状況でした。

しかし、コンピュータ同士の大会を初めて観戦して以来、あっという間にその面白さに嵌ってしまいました。その理由は、会場の熱気、“人間の”将棋大会にはない賑やかさ、観戦者も一緒に参加できる楽しい雰囲気、そして何よりもプログラマの方々の少年のような純粋な目の輝きが、とても魅力的だと感じたからです。そして、その印象は5年たった今も変わっていません。

しかし、その5年の間に「コンピュータ将棋」の棋力は大幅に変わりました。特に昨年渡辺明竜王と2006年第16回大会の優勝ソフトである“Bonanza”との公開対局が行われたのは記憶に新しく、世間でも非常に話題になりました。それは、渡辺竜王が不利になっていた局面もあったほどの大熱戦だったからです。

1年前にプロのトップ棋士と大熱戦を戦えるほど棋力の上がっている「コンピュータ将棋」に今回アマチュアの方が負けてしまったとしてもそれほど驚くことではなかったのかもしれませんが、しかし、このような場で「コンピュータ将棋」が人間に平手で勝利するというのは初めての出来事で、非常に貴重な勝利でした。私はきっとこの瞬間を忘れないと思います。



そして今回、以前見られたいわゆる“コンピュータらしさ”というものは影を潜め、「これは人間みたいですね」「プロの将棋みたいですね」と解説のプロ棋士が連発するまでに技術力が増していました。特に注目されていたのは、今まで言われていた“攻め”の技術よりも“受け”の技術が長けてきたことです。そして、予選から本戦ま



熟慮する加藤アマ(右)と棚瀬氏(中)

で全体的にレベルアップをしており、層の厚さが印象に残りました。

また私が今まで見てきて、今回特に感じた「コンピュータ将棋」の強さは、先入観に囚われない強さでした。たとえば人間だとこの変化は怖いから、と別の変化にする場合があるのに対しコンピュータは怖がらない。どんな状況になっても慌てない、焦らない、震えない、“心”の状況に左右されない強さはやはり大きいと思います。人間はそんな「コンピュータ将棋」とプレッシャーを抱えながら戦わなければなりません。今回「コンピュータ将棋」のトップのレーティングは2700～2800点になっているとお聞きしました。まだまだ棋力がアップしていくとすれば、今後どれだけ強くなるのか想像もつきません。



ここで私には1つ気になることがあります。「コンピュータ将棋」には、人間が長年の経験から培ってきた“感覚”というものを植え付けることはできるのでしょうか。もし「コンピュータ将棋」が技術だけでなく、“感覚”までも持つことができたら、人間からすると少し恐いような残念なような、どこかに何か人間とコンピュータとの違いは残しておいてくださいね。

もちろん私は「コンピュータ将棋」がどんどん強くなっていくことに否定の感情を持っているわけではありません。むしろ、これからの先の見えない未知の世界に期待を持ち、と同時に少し不安も抱いているだけです。個人的にはこれからがとても楽しみで、脅威というよりは興味を持って見守りたいと思っています。

しかし、いつかプロ棋士が「コンピュータ将棋」に勝てなくなるという時代が訪れたら、本当はがっかりしてしまうかもしれません。けれど、それも現実であり、「コンピュータ将棋」はコンピュータの新しい可能性をどんどん作り上げているのでしょうし、その行く末を見たい、と思うことは一女流棋士として当然のことともい



大盤解説の安食女流初段

えるのではないのでしょうか（そもそも私が対局するわけではないので気楽な立場からそう言えるのかもかもしれませんが、すみません）。

また、プログラマの方のお話によると、「コンピュータ将棋」にも弱点があるらしいのです。それに気づけばコンピュータにはまだ負けない、というようなことを仰っていましたが、本当に弱点はあるのでしょうか。これがもう1つの気になっていることです。

これからは、人間は、コンピュータと対局するときには、人間と対局するときと同じように、相手の“コンピュータ君”の棋風や得意な戦型を研究して対局に望まなければならないのでしょうか。相手の弱点を探してお互いに研究をぶつけ、真剣に戦う。それもまた興味深いのではないかと思います。



さて来年の「世界コンピュータ将棋選手権」はいつたいどうなっているのでしょうか。

新しいコンピュータソフトが出てくるのでしょうか。またエキシビションではどのような対局が見られるのでしょうか。今から興味津々です。

今後の「コンピュータ将棋」のさらなる発展と将棋界の発展を願って…筆を置きたいと思います。

(平成20年6月13日受付)

#### 安食 総子

(社)日本将棋連盟 女流棋士 初段。東京都武蔵野市出身・青野照市九段 門下。得意戦法は四間飛車。現在 NHK 杯将棋トーナメントで読み上げ係を務めている。趣味は読書と音楽。夢は将棋を世界に広めること。